

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】 一色 舞子

【所属】(助成決定時) 北海道大学大学院文学研究科

【研究題目】 日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における歴史語用論的研究

-「-てしまう」「-ておく」「-てみる」と「-eo beolida/-go malda」「-eo duda/-eo nohda」「-eo boda」を中心に-

【研究の目的】

本研究の目的は、日本語と韓国語の補助動詞を対象とし、歴史語用論的観点から、意味の拡張という一種の言語変化の要因とメカニズムを明らかにすることである。日本語と韓国語両言語の補助動詞を扱うことにより、従来のような個別的研究では明らかにできなかった、異なる言語間の言語変化における異同を詳らかにするのみならず、最終的には、英語を中心とした一連の意味変遷研究における日本語と韓国語からの提言という、両言語の類型論的な位置づけを行う。ただ、従来の研究のような共時的分析のみでは、意味の拡張という言語変化のプロセスを把握し、さらにその方向性を論証するのは難しい。したがって、本研究では、日本語と韓国語両言語における歴史的文献からのデータを基に、補助動詞という言語形式が時間の経過とともにいかにして変化・発達したかを記述し、説明する。

【研究の内容・方法】

日韓補助動詞の意味拡張を分析するにあたり、「歴史語用論」的手法をとる。歴史語用論には複数のアプローチがあるが、そのうちの「形式-機能の対応づけによる通時的語用論」の手法に基づいて分析を進める。通時的語用論とは、「特定の言語項目がコミュニケーションの中でどのように使用されたのかを、時間軸に沿って通時的に観察する領域」であり、「語用論的事象が時代的にどう変化してきたかを(少なくとも)2つの時代について比較し、その間の推移を記述し、変化の要因とメカニズムを解明すること」を目指す。そのうちの形式-機能の対応づけによる通時的語用論研究は、「特定の言語形式にどんな機能があったのかを通時的に調べるタイプの研究」である。

現在最も注目しているのは、日韓補助動詞における主観化、間主観化のような意味変化である。したがって、本研究では、日韓の補助動詞の使用を歴史的なデータの中でたどって時代別の出現頻度や分布パターンを分析し、以上のような意味変化の方向性を演繹的に検証する。ただし、単なる頻度分析に終わらないように、文脈からの情報を精査し、いかなる要因・メカニズムが意味変化に関わっているのかを明らかにする。

歴史語用論では、書かれたテキストであっても話しことば性の度合いが高いと想定できる資料を分析の際のデータとすることが正当化されている。したがって、過去の話しことばに直接触れられずとも、以上のような実際の話しことばに近いと考えられる文字資料であれば、語用論的研究のデータとして成立する。よって、日韓両言語における歴史的資料の中から、話しことば性の度合いの高い文献を選出し、データとして使用する。幸いにも、両言語における以上のような歴史的文献は豊富に存在する。また、一言語による個別資料のみならず、日韓対訳形式の語学書や日鮮新小説という、両言語の様相を同時代的に把握できる資料も存在する。これらのような文献をともにデータとして扱い、研究を進める。

【結論・考察】

ここでは、日本語の補助動詞「-ておく」と韓国語の補助動詞「-eo nohda」「-eo duda」を中心に述べる。

中古・中世資料において「-(て)おく」が「他動性の低い動詞」をとる場合、現代語にはない「～し残す」「～し続ける」「～して覚える」のような一種の結果状態の持続として解釈される。これは中古・中世資料において最も多く観察される。また、「-(て)おく」に関しては形態的にも興味深い現象が観察された。上代から中世資料にかけては「動詞連用形+おく」が圧倒的であるが、中古・中世資料から徐々に「動詞連用形+て+おく」が観察され始める。これは「-(て)おく」が前接動詞として複合動詞をとるようになったこと、中古から中世にかけてのアスペクト助動詞の体系の変容が関連していると考えられる。

一方、韓国語の「-eo nohda」「-eo duda」は、18、19 世紀頃からその補助動詞的用例が観察され始める。日本語の「-(て)おく」と同様、これらの形式も主に他動詞を前接動詞としてとり、一種の結果状態の持続を表すものとして解釈される。また両者における意味機能上の目立った相違点は見られないが、「-eo duda」の方が比較的早い段階で補助動詞としての機能性を見せている。